

Fate/Grand Watcher

黒き来訪者

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

いろんな時代を見てきた狐

ときには振り回されたり

ときには相談にのったり

色々な事をしてきた狐

「さて今回はどんな物語りが見れるのか」

目次

## プロローグ

やあ私は藤丸立花、変なアルバイトにレイシフト適性があるとかで受かりそこで私の事を先輩と呼ぶマシユに起こしてもらったり所長に怒られたりと何やかんやあり、(あれ、僕のこととは?!): Dr. ロマンの声が聞こえて来たりしなかったりそんな事があり今私はデミサーヴァントとなったマシユと一緒に特異点Fに来ています。そこでシャドーサーヴァントに襲われたところを、見ていたキャスターに協力してもらい倒し、今所長の命で人員確保の為英霊<sup>サーヴァント</sup>?を召喚しようとしているところですよ。

「頑張つて下さい先輩!」

「まあ、運試しと思つて気楽にやんな」

「藤丸!強力なサーヴァントを召喚しないと承知しないわよ!」

「了解です!所長!」

私は魔法陣に魔力を流し、所長に教えてもらった呪文を唱え始めた。

「素<sup>そ</sup>に銀と鉄。礎<sup>いしずえ</sup>に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。

四方<sup>しほう</sup>の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路<sup>さんさろ</sup>は循環せよ。  
閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻ときを破却する。

——— 告げる。

汝<sup>なんじ</sup>の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理<sup>ことわり</sup>に従うならば応えよ。

誓いを此処ここに。

我は常世<sup>とこよ</sup>総すべての善と成る者、

我は常世総すべての悪を敷しく者。

汝三大の言霊を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

その瞬間、凄まじい光と突風が起こった。

「「キヤツ」」「うおつ」

『何だ！この凄まじい魔力は?!』

キュイイイイイイイン

魔法陣が更に輝き出す、そして徐々に風は収まり光も消えて行つた。

皆が目を開けると魔法陣があつた所に銀髪で狐の耳と尻尾が生えている人が目を閉じ静かに立っていた。

その人物はゆつくりと目を開け周りを見渡し此方を見て少しビツクリしたように目を見開いた後、微笑みながら

「サーヴァント、クラス ウオッチャー 番人 召喚に応じて参上しました貴女が僕

のマスターだね？」

「…あつ、はい！私がマスターの藤丸立花です宜しくお願いします！」

「マシユ、キリエライトです宜しくお願いします。」

「こう言う召喚では初めてでね何かとあるかもしれないが宜しく頼むよマスター達」

『ウオッチャーだつて?!すごいじゃないか！いきなりエクストラクラスを召喚するなんて！それにさっきの魔力量からして相当強いサーヴァントだと思うよ！』

「待つて、今貴方初めてと言つたけれどサーヴァントなんだから召喚された事が無いなんて事はあり得ないは！後真名も言いなさい！」

ウオッチャーは少し困った顔をした後、

「僕は特殊なサーヴァントでね、いつも召喚と言うより呼び出されるからこう言つたちゃんとした召喚は初めてでね後、真名の事だが私には名前が無くてね、直案だがいつも銀狐キンコと名のつているからそう呼んでくれて構わないしマスター達が呼びやすい呼び方で呼んでくれて構わないよ。」